
Rebirth the Earth

八尋那托

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e b i r t h t h e E a r t h

【Nコード】

N 8 2 9 0 P

【作者名】

八尋那托

【あらすじ】

戦争によって深く傷つけられた地球は滅びに向かっている。
そんな中立案されたのが「R e b i r t h t h e E a r t h
計画」だった・・・。

プロローグ

22XX年、地球は刻一刻と滅びへの道を辿っていた・・・。

平成という時代が終わり、幾星霜。

その後の年号は決まっていない。

いや・・・正確には決めることができなくなった、というべきか。
日本という国の天皇が亡くなってしまったのだから。

時代とともに進化したコンピューターや機械類。

それは爆発的に増加した人類の情報を整理するためだったり、自分たちの暮らしを豊かにするためだったり。

更なる機械文明の発展を望んで人類が行きついた先は、全ての作業を機械化する事だった。

コンピューターによって統御された世界はしばらくの間は安泰そのものだった。

コンピューター同士がCP戦争を起こすまでは。
コンピューター

もし人類が全てを機械に任せていなかったらCP戦争は起こらなか

ったかもしれない。

CP戦争と聞いてただネット上でコンピューターが争っていると想像したならば、それは間違いだ。

全てを機械化されたコンピューターは、敵国コンピューターが支配する領地に攻撃を開始する。

当然そこに住んでいる者たちはそれに巻き込まれる。

そうになると敵国もただ傍観しているわけにはいなくなるのだ。

別名第三次世界大戦とも呼ばれたこの戦争では最新の核兵器数十発が使用され、瞬く間に地球は死の世界に変貌した。

約80年続いたこの戦争はコンピューター同士の相討ちという形で終結した。

しかし、戦争によって穿たれた傷跡は深く、大地は腐り、動植物は姿を消した。

増えすぎた人口は食糧危機を招き、弱いものから死んでいった。そしてそれから100年あまり。

いまだに大地には草木一本生えていない。

人々は死にかけた地球を救うためにある計画を立案した。

それが「Rebirth the Earth 計画」略してRTE計画である。

だが、オレがそのことを知るのはまだだいぶ先のことである……。

1話 過去の章

凍るような寒さでオレは目を覚ました。

壁に空いた穴にかけてある布から夕日の光が差し込んでいる。穴が開きまくりの毛布からオレはゆっくりと這い出した。

・・・寒い、寒すぎる。

廃ビルの隙間風は容赦なくオレの体温を奪っていく。

ただでさえ服がズタズタだというのに・・・。

もう一度毛布に潜り込みたい気分だったが、オレはあきらめた。

どうせ毛布に入ってもほとんど変わらないし、もう夕方だ。

夕方には潤也じゅんやと昴すばるが仕事に出かけているから、オレはそれとってきた獲物をさばく係だ。

床がひび割れ、ところどころ見える鉄筋に気をつけながら靴を探す。靴と言っても運動靴ではなく獣の皮を剥いで作ったやつだ。

核兵器による気候変動で動物たちは巨大化したり凶暴になったりしているが、オレたちにとって重要なのは”食えるのか””食えないのか”だけだ。

この食糧危機では弱いものから死んでいく。
オレたちみたいな非力な子供に残された道は、スリか、獣の肉を食べるかくらいしかない。

部屋には明かりがないから靴を見つけるのも一苦労だ。
やっと見つけたゴワゴワの靴を履き、靴ひもをしっかりと結ぶ。

とりあえず体を温めなくちゃいけないな・・・。

———
—+—
—+—
—+—
———

崩れて寸断された階段の隣にかかっている梯子で2、3段降り、途中でジャンプして床に着地する。
木で塞いである床が大きく軋む。

「ちょっとジン！床が抜けたらまた直さなきゃいけないるじゃない！」

台所に立っていた明日香あすかがほとんど何も入っていないスープをかき混ぜながら怒った。

今年7歳になる明日香はしっかりもので、みんなのお姉さんの存在だ。

ボロボロの服をまもってはいるが、オレとは違ってしっかり繕って

ある。

「そうだよ、ジン。木なんて今きちょーなんだからね！」

「そーだそーだ！」

席についてスープを啜っていた5歳の翼と4歳の陸が口々に文句を言う。

「あーもう、うっさいうっさい。壊れなきゃ問題ないだろ。明日香
オレにもちよーだい」

手をひらひらさせながらオレは席に着いた。
ここには全部で6人の子供が住んでいる。

オレ、明日香、翼、陸、そして今仕事に出かけていてもうすぐ帰っ
てくるであろう2人。

明日香がはい、と欠けたお椀にスープを入れてくれる。

ここにいるやつらはみんな孤児だ。
みなしご

親に捨てられたり、親が死んでしまったり・・・。

オレはどっちなんだろうか。

オレには5歳から前の記憶がない。

覚えているのは名前だけだ。

温かいスープを啜りながらしばらく考える。

しかし記憶を掘り起こそうとする度に、左目が鈍く痛む。
なぜオレは覚えていないのか、そしてこの左目が灰色なのはいった
い何を意味するのか……。

あれから季節が3回巡ったからオレは今8歳ということになる。
誕生日すらわからないけど……。

———
—+—+—+—

淡いオレンジ色だった空が藍色に変わり始める頃。

「「ただいまー」」

1つ下の階から2人分の声がした。

「あ、潤にいと昴にいだ！」

「おかえりなさあーい！」

翼と陸がバタバタと下に降りていく。

——潤也とは同じ年のはずなのにどうしてオレは呼び捨てなんだ
か……。

オレも2人をねぎらいに行こうとしたときだった。

「潤にい、そのケガどうしたの!？」

「あすかねえ! じゅんにいけがしてるっ!」

オレは急いで立ち上がり、もとは手すりがあった場所から飛び降りた。

2階から1階はそこまで高いわけじゃないからオレぐらいになれば簡単に飛び降りれる。

体勢を崩さずそのまま潤也の元に駆け寄る。

「おー、ジンやん。ワイの分のスープ残っとるか? この寒さだとちとキツツイからなあ」

「潤、あまり話したら傷が・・・」

潤也に肩を貸している昴が心配そうに呟く。

潤也の肩から二の腕辺りまで何かで浅くだが切られたような傷があった。

「潤君、大丈夫!？」

救急箱を抱えた明日香が急ぎ足で階段を下りてくる。

「明日香ちゃん、心配せんでも大丈夫や。ワイはそんな簡単に死ぬようなヤワな男やないで」

明日香に包帯を巻いてもらって少しニヤついている潤也にオレは尋ねた。

「その傷、どうしたんだ？」

「なーに、食いもん盗んだ時に少し切りつけられただけや。油断したわ。でもな、こんな3日もありゃ治るわ」

とびきりの笑顔をした潤也にオレは頭を掻きながら唸った。

こいつの瞬発力と生命力の高さは本当に侮れないからなあ・・・。

過去の章 ― 2 ―

潤也の治療が終わった後、2人が調達してきた食糧を机の上に並べる。

ネズミ3匹に缶詰5個・・・なかなか今日は運が良かったようだ。

ひどい時には3、4日くらい何も食べられない時もあるから今日は大収穫だと言える。

「ワイがナイフ持ったおっちゃんから命からがら缶詰奪って来たんやからな、感謝しーや？」

翼と陸は抱き合って喜び、缶詰を開けるために台所に駆けていった。第三次世界大戦が終わってから40年余りたっていまだ人類が死滅していないのは人類が地下に潜ったからだ。

オレたちは地上にある廃ビルを住みかとしているが食料調達などは地下都市で行っている。

地上がこんな状態である以上、地下は人類に残された最後の砦だとも言える。

「ジンー、これあけてー」

陸が錆びた缶切りをオレに手渡した。

その瞳があまりにも輝いていたからオレは仕方なく缶を開けてやった。

陸は缶詰を受け取ると翼と一緒に中身をじっと眺めた。

「食べないのかい？」

昂が問いかけると2人は顔を綻ばせた。

「みんなで食べたほうがおいしいでしょ？」
「うんっ」

純粹で優しいその言葉に、昴はしばし目を見張った後微笑み、明日香はいい子ね、と2人の頭をなでた。

みんなが微笑ましい会話をしている間にオレは自分の仕事をちゃちゃっと済ませてしまおう。

ネズミ3匹を素早く愛用の小型ナイフでさばき、血抜きをする。

1番大きいやつは燻製にして保存用にする。

こうすることで食糧がとれなかった日でも飢えを凌ぐことができる。

みんな同じように食べれるように均等に分けた後、明日香にバトンタッチする。

オレはさばくことは出来ても、料理はからっきし駄目だからだ。

前に一度スープを作ったところ、全員一致で殺人兵器だ、と言われてしまった。

ささやかではあったが、オレたちは平和に暮らしていた。

———
—+—+—+—

事件はいきなり起こった。
神様なんていつも気まぐれだ。

だがオレはその気まぐれさを心の底から恨みそして憎んだ。

潤也が怪我をしているため、次の日はオレと昴で出かけることになった。

無事に夕方までに食糧調達も終わり戻って来た時だった。

「ジン、昴さん・・・翼と陸がまだ戻ってこないの・・・」
明日香によると翼と陸はいつもの遊び場に行ったつきり朝から戻ってこないのだという。

地上には危険な獣がうろついていることも少くない。
それでもオレたちがここに住んでいるのは地下に居場所がないからだ。

地下都市の警備は厳しく、しかも住居はどこもいっばいで廃墟なんてものは存在しない。

食糧危機のこの時代にオレたちを引き取って面倒を見てくれるお人好しいない。

「探しに行こう。明日香、遊び場の場所はわかるかい？」

「それが・・・2人は内緒って言って教えてくれなかったの。そんなに遠くはないと思うんだけど」

明日香の目が潤む。

「心配すんな。オレたちが見つけてくるから」

明日香は涙を拭いながら、小さく頷いた。

瓦礫や建物の残骸を左右に見据えながらオレたちは廃ビルの間を進んでいく。

幸いにして地面には砂のおかげで2人の足跡が残っていた。

しばらく歩いて行くと足跡は消え、白い建物が現れた。

周りをフェンスが囲い、立ち入り禁止の札が風にさみしく揺れている。

フェンスの下の方には子供1人くらいが通り抜けれそうな穴が開いていた。

「ここは・・・？」

「どうやら原子力発電所のようなだよ、ほら」

昴が指さす方向には擦れて読みにくいのが、“第59エリア 原子力発電所”と書かれた看板があった。

「こんなところに原子力発電所がまだ残ってたのか・・・」

「急ごう、翼君や陸君が心配だよ」

オレより少し背が高い昴を見つめ、頷いた。

昴、オレの順番でフェンスをくぐる。

中は何んだか息苦しいような気がした・・・気のせいだろうか？
明かりもないひび割れた床を進んでいく。

コツ、コツという靴の音以外は何の音もせず不気味だ。

小部屋などを1つ1つ丁寧に見ていくが、誰もいない。

「おい翼！陸！いるんなら返事しろー！」

————ン！————ばるにい！

かすかに陸の声がどこからか聞こえた。

声のしたほうに走っていくと瓦礫の山のそばで泣きじゃくる陸がいた。

「陸君！無事ですか！」

しかし翼の姿が見えない。

「陸、翼は・・・？」

「いつもみたいに、ここであそんでたらうえがくずれて・・・つばさにはボクをたすけてくれたの・・・でもっ！」

よく見れば瓦礫の中に微かに翼の服が見える。

オレは昂に言うよりも早く瓦礫をどかしていた。

昂もそれに習う。

「翼！おいっ、翼！！」

「ジン、この大きい瓦礫をどかすのを手伝って！」

あらん限りの力を入れて瓦礫を横にどかす。

そこには血だらけの翼が横たわっていた。

「翼・・・く・・・ん・・・」

絶句するしかなかった。

翼はもう虫の息だった。

「つばさにい、ごめんね。ボクのせいで・・・」
「気にすんな・・・陸。だからもう泣くな。男の子がそんな簡単に泣いちゃダメだ・・・ろ・・・」

翼の手は陸の頭を優しくなでた後地面に落ちた。

「翼――――！！！」

どうしてだよ、神様。

翼が何か悪いことをしたのか。

どうしてっ――！！

――＋――＋――

翼はビルの近くの地面に埋葬した。

血はつながっていなくとも翼は家族同然だった・・・。

「うっうう・・・」

みんな涙が止まらず、ついには空も泣きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8290p/>

Rebirth the Earth

2011年1月4日01時59分発行